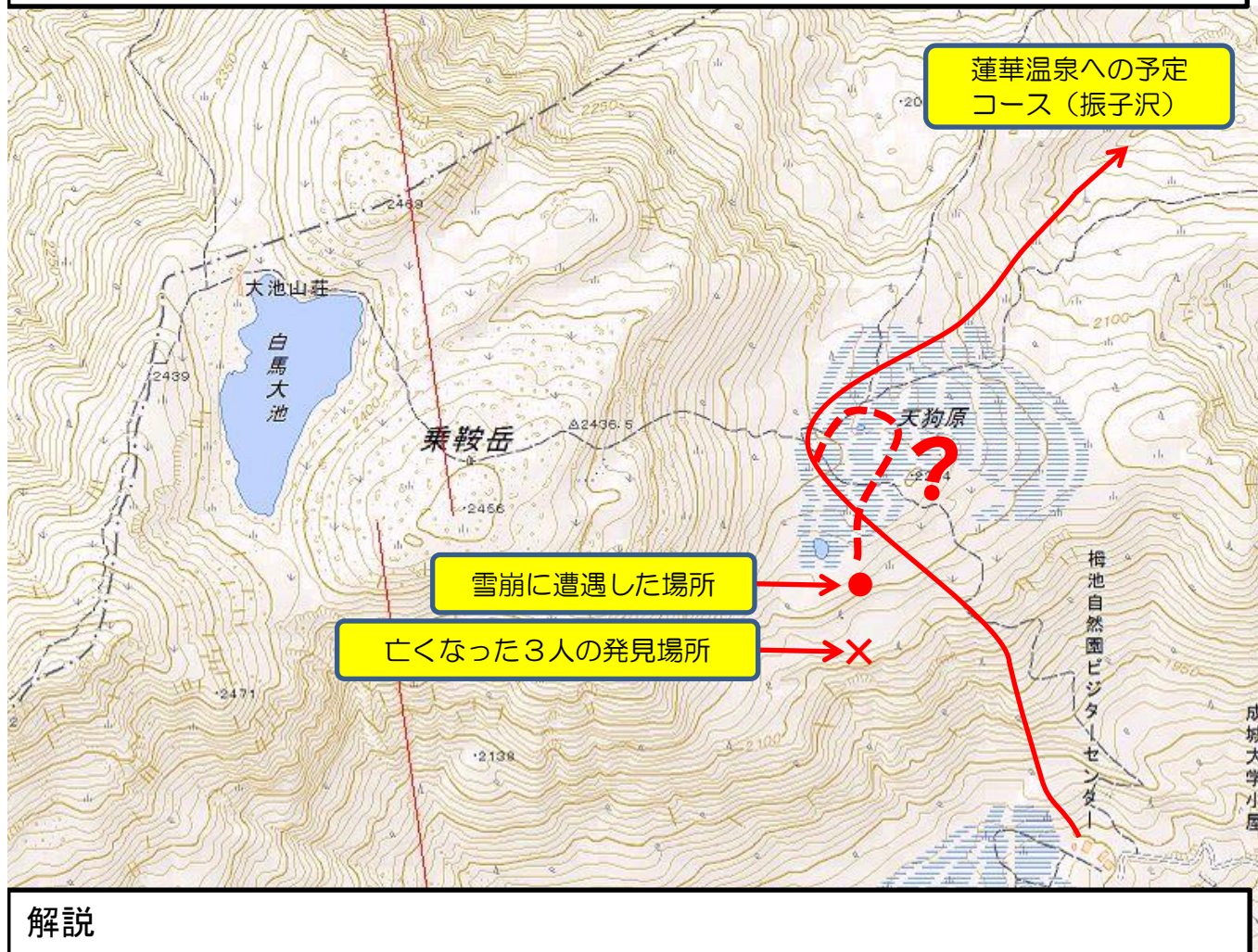


白馬乗鞍岳遭難(2006年4月)

慣れ親しんだスキーツアーコース。吹雪のため、この日は、いつもの樺の木が見つけれない。道が分からないため、引き返そうとした時、小さな雪崩に遭遇し、装備を流された。一晩ビバークを余儀なくされ、5人のうち1人は自力下山。3人死亡。残りの1人は、心肺停止状態から4時間後に奇跡的に蘇生した。



解説

毎年恒例で、蓮華温泉までの慣れ親しんだスキーツアーコース。吹雪のため、この日は、いつもの樺の木が見つけれない。天狗原で、リングワンデルングに陥ってしまい、道が分からなかった。12時~13時ごろ、引き返そうとした時、小さな雪崩に遭遇し、共同装備のツェルト、ファーストエイドキット、ヘッドランプの緊急時に必要な装備が流されてしまった。ビーコン、スコップ、プローブは誰も持っていなかった。持っていたのは、コンパスだけで、地図やGPSは不携帯。一人だけ持っていたヘッドランプは先ほどの雪崩で流された。引き返しの途中で、携帯電話が通じ、白馬観光開発に「雪崩で装備が流されたので引き返す」と連絡を入れた。「救助を要請しますか」と職員が尋ねたところ、「それは結構です」と断ってしまった。斜面を登り返し、目印を探すのが、吹雪のため見つからない。またしてもリングワンデルングに陥ってしまう。夜の帳が近づき、スキーの板で数人が入れる窪みを作った。夜の中にビジターセンターの明かりが見えた。希望の光だった。

朝までに、1名が命を落としたが、翌日、4人が下山を試みた。1名が下山したが、残りの2人は途中で力が尽きた。残る1名は、心肺停止状態であったが、4時間後に奇跡的に蘇生した。

ターニングポイントは、装備を流されたにも関わらず、白馬観光開発に連絡が通じたとき遭難救助要請をしなかったこと。残念である。